

平成 24 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

本校は今年で創立 71 年目を迎えた中堅伝統校である。昨年は創立 70 周年記念行事が行われ、多くの卒業生や地域の方々からの本校に対する熱き期待を実感したところである。これらの思いを正面から受け止め、「明るく、楽しい、元気で活気のある伝統校」をめざすことを柱としながら、諸課題の解決に教職員一丸となって立ち向かう。

1. 知・徳・体の調和のとれた人間育成。在校生には「入ってよかった」、卒業生には「卒業して良かった」「厳しかったけれど力をつけることができた」と言われる教育を行い、さらには中学生に「入りたい」と思われる学校をめざす。
2. 地域との連携を密にし、本校や地域の社会資源を活用した教育活動を推進する。
3. キャリア教育をよりいっそう推進することを通じて社会人として必要な力を身につけ、多様な進路実現をサポートし、社会に貢献できる人材を育成する。

2 中期的目標

1 確かな学力への取組み

- (1) 新学習指導要領を踏まえ、基礎的・基本的な学力の定着をめざした教育課程の実施。
- (2) 今年度から開設する専門コースを充実させ、生徒のニーズや興味関心にあった本校独自の魅力あるコースに発展させる。
 - ア 技術革新の著しい現代社会の中で、逞しく生きることのできる心構えを身につける。
 - イ 社会人として必要な資格の取得や本校、地域および外部との連携を含んだ教育資源の活用を取り入れる。
- (3) 生徒の進路希望や学習意欲、個々の到達状況に応じた学習メニューを提供し、確かな学力を身につけて卒業できる生徒を育成する。
 - ア 学習意欲のある生徒に対しては放課後や休業中を活用した講習を積極的に実施し、応用力の養成を図る。
 - イ 各教科が行う講習が継続したものとなるように進路指導部と教務部が全体を把握、コーディネートする。
- (4) 教員全体が授業力の向上をめざし、授業の工夫や改善に取り組む。
 - ア 昨年度全教員で行った「授業評価アンケート」にさらなる工夫や改善を取り入れ、授業改善につながるよう継続して検討する。

2 自主性および規律ある生徒の育成と活気ある学校づくり

- (1) 自治会（生徒会）主体の学校行事の運営を教員がサポートし、生徒の自主性を育てる。
 - ア クロスカントリーに代表される本校独自の学校行事を活性化し、生徒に魅力あるものにする。
 - イ 生徒の委員会活動を活性化させ、自主活動の場を広げる。
- (2) 生徒が充実した高校生活を送る一つの要素として部活動への参加を増やし、より活気ある学校にする。
 - ア 部活動の取組みや成績を HP 等を活用して公開し、地元中学校との交流も進める。
 - イ 体験入部期間を設け、生徒がクラブ活動をより身近なものとして捉えることのできる工夫を取り入れる。
 - ※ 現在約 40% のクラブ加入率を、平成 26 年度には 60% に上昇させる。
- (3) 集団生活に必要なルールを教え、身だしなみや遅刻についての指導を継続して粘り強く行う。
 - ア 生徒指導の統一性を図るために「生徒指導の手引き」を作成し、懲戒規定の見直しも行う。
 - ※ 遅刻の学年別、月間、年間トータル数等を把握し早朝登校指導などの効果を検証しながら、3 年間で 20% 減らす。

3 キャリア教育の指導計画の確立と進路保障の取組み

- (1) 「総合的な学習の時間」と LHR 等を活用して、志学とキャリア教育、人権教育を連動させた総合教育を行う。
 - ア 入学から卒業まで全体を見通した指導計画を作成する。
 - イ 府が実施する実践キャリア教育推進事業を軸とし、平成 25 年度完成をめざして立てた計画の実施と効果検証を行う。
 - ウ 担当チームは、首席、進路指導部、各学年の担当者とする。
- (2) 生徒一人一人の進路希望に対応した進路指導を行い、進路別講習と連動し、進路実績のアップをめざす。
 - ア 個人進路指導カードを作成し、パート別指導を行う。また、情報提供も適切かつ迅速に行う。
 - イ 伝統校としての評価を取り戻すために進学実績を上げることを目標とする。
 - ※ 3 年後に難関私立大学への合格者を 10 名以上にする。

4. 80 周年に向けて、地域に望まれる泉大津高校のミッション、ビジョンの具体化

- (1) 将来構想ビジョン委員会で、3 年間で育成する泉大津高校生のあるべき姿を検討し、泉大津高校のキャッチコピーの作成、3 年間に行われる学校行事の見直しを行う。
- (2) 学年や教科、分掌の取組みが有機的に連動しているかを総合的に判断する組織をつくり、校内組織の見直しも行う。
- (3) ミドルリーダーが中心になって、今後増えてくる経験が少ない教員への人材育成も組織的に行う。
 - ※ 今年度中に早急に見直しを行い、方向性を提案する。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成24年11月実施分]	学校協議会からの意見
<p>【学習指導等】 「授業が楽しくわかりやすい」の肯定的回答はH20年度21%から昨年は41%と倍増したが、今回34%と減少した。明確な理由は不明であるが、わかりやすい授業への生徒の要求がより高くなっている（ただし、同時期に実施した生徒の授業評価アンケートでは授業満足度62%となっている）。一方で「授業でパソコンやコンピュータをよく用いる」が昨年39%から65%へと大きく増えているように、授業方法の工夫や改善を進めていけば、生徒の満足度は上昇する。教員が積極的に研究授業等を行いチームで授業改善に取り組む体制の確立が必要である。</p> <p>【生徒指導等】 「文化祭・体育祭は楽しくできる工夫がされている」39→63、「生徒指導の方針を保護者に示している」59→65のように、昨年より肯定的回答が上昇している項目が多い。ただし、「命の大切さや社会のルールを学ぶ機会がある」51→39と減少している項目もあるので、HRや総合的な学習の時間の内容を再構築する必要がある。「進路についての情報を知らせてくれる」59→67(生徒)「将来の進路や職業に関し適切な指導を行っている」54→82(保護者)の満足度が大きく上昇した。キャリア教育の成果が出始め、就職内定率と中堅大学への挑戦者が増えたのに関連があると思われる。「災害や事件時の行動が知らされている」40→57「家庭連絡や意思疎通を積極的に行っている」55→65が上昇し、津波想定避難訓練を実施した効果が出ている。</p> <p>【学校運営】 「保護者・地域の人々の授業参観する機会を設けている」74→38と減少した。昨年度は年2日だった授業参観を1週間ずつ年2回の機会を設けたが、ほとんど参観者はいなかった。実施方法や案内について再検討を要する。教員同士では、「校内で他の教員の授業を見学する機会がある」がここ3回の調査で19→57→64と大きく伸び、授業改善への意識向上がみられる。一方で、教科、分掌や学年の運営面で教職員相互の連携を一層推進するための会議等の在り方を検討していく必要がある。</p>	<p>第1回(平成24年9月8日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○生徒が自宅学習を行う時間数を調べてほしい。 ○昨年は遅刻数が大きく減っているのは喜ばしいが、携帯でメールしながら登校する生徒の姿を見る。そのような面の指導もしてほしい。 ○様々な課題を持つ生徒が在籍しており、学校として皆で協力しながら指導している認識している。時には専門家の力を借りて指導に生かしてほしい。 ○学区制が廃止される中、新カリキュラムの特徴などを中学生にもっとアピールしてほしい。 ○懲戒規定を見直し、いじめに関する規程を盛り込むことを検討してほしい。 <p>第2回(平成25年3月1日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学校教育自己診断で「学校が楽しい」の肯定的回答80%超をめざしてほしい。 ○先生の普段の言葉遣いについて気をつけてほしい。 ○授業公開については、保護者は教員を見たいので、たくさん見られるように実施方法を工夫してほしい。 ○土曜英語講習は外部講師にたよるより、教員が連携して講習の一環としてやっていく方がよりよくなる。 ○各種検定試験（英検、漢検など）を積極的に実施し、生徒に目標を持たせる取組みにしてほしい。 ○自己評価で、中学校との部活交流や遅刻者減少はよく頑張っている。それぞれ◎をつけてよい。 ○教職員の他校（他府県の高校など）との交流を増やせば、本校への取組みの意識が変わってよい。 ○地元や近隣の幼稚園、保育所との連携を推進することで生徒の視野を広げることができ、学校の活動の情報発信もできる。 ○PTAや同窓会の思いを受け止めて、連携を密にしてほしい。 ○看護系の進路希望者の指導には、専門に指導できる教員を育ててほしい。また、老人介護や看護体験を推進し、看護マインドを育成してほしい。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 確かな学力への取組み	<p>(1) 新カリキュラムや専門コースと連動した進路指導の取組み</p> <p>ア 平成24年度入学生用教育課程の実施 イ 専門コースの充実</p> <p>(2) 学習意欲の向上と授業改善の取組み</p> <p>ア 確かな学力を身につけて卒業できる生徒を育成する。</p> <p>イ さらに授業改善をめざす。</p>	<p>(1)ア・進路別に類型を設定、その中に選択科目の多く設置し、多様な進路に対応できる新カリキュラムへ円滑に移行する。 イ・生徒のニーズや興味関心にあった独自の魅力ある情報活用専門コースをスタートする。 ・教科情報を中心とした専門コース運営委員会を組織し、専門科目のシラバスの内容を精選する。 ・社会人として必要な資格の取得や本校と地域および外部との連携をさらに進め、より教育資源の活用を取り入れたものにする。</p> <p>(2) ア・学習意欲のある生徒に対しては、放課後や休業中を活用した講習を積極的にを行い、応用力の養成を図る。 ・各教科が行う講習が継続したものとなるように、進路指導部と教務部が連携して全体を把握しコーディネートする。 ・数年間定着した民間の教育産業と連携した土曜英語講習をさらに発展させたものにはできないか検討する。 ・学力の不足している生徒には、1年の早い段階で英数国3教科について基礎学力テストを行う。結果を教科で分析し、苦手な生徒の補習計画を立てるなど、高校の授業についていける方策を講じる。</p> <p>イ・教員全体が授業力の向上をめざし、授業の工夫や改善に取り組む。 ・授業向上に関する校内委員会をつくり、全教員が行っている授業評価アンケートの活用方法や授業改善の方策を継続して検討する。 ・教科の枠を越えた教員間の互見を行えるように公開授業週間を設定し、授業見学を実施し、活発にする。</p>	<p>・新カリキュラムの実施・検証</p> <p>・専門コース科目のシラバス完成</p> <p>・講習や補習の全体像を把握し、講習の数を増やす</p> <p>・教科で苦手生徒の個別カルテを作成する</p> <p>・授業向上委員会設置</p> <p>・年2回の公開授業週間を実施。教員間互見の回数化</p> <p>・「授業が楽しくてわかりやすい」の肯定50%以上を目指す。 (自己診断では H20 21% H23 41%)</p>	<p>(1)ア・多様なニーズに対応した、基礎学力重視した1学年週31時間の特色のある新カリキュラムが完成した。(◎) イ・専門コースのシラバスを作成した。(○) (2)ア・3年対象の講習は11科目のべ369名が受講し進路実現に活用できた。また、1・2年の講習も受講者が大幅に増えた。(◎) ・土曜英語講習受講者は昨年の約8割程度に減少した。今後、受講者を増やすため、校内の講習との関連付けを検討していく。 イ・授業力向上委はビジョン委員会が兼ね、11月に授業アンケートを全授業で行った。(○) ・年2回の公開期間を設け、最低1回の互見を申し合わせたが全体化できなかった。次年度は全教員で実施する。(△) ・「授業楽しい」の肯定的な回答は34%であり、目標を下回った。(△)</p>
2 自主性および規律ある生徒の育成と活気ある学校づくり	<p>(1) 自主活動と部活動活性化への取組み</p> <p>ア 自治会(生徒会)活動の活性化</p> <p>イ 部活動の活性化と情報発信の取組み</p> <p>(2) 基本的生活習慣の確立と規律ある集団生活</p> <p>ア 集団生活や生徒指導の充実させる イ 災害時の行動についての指導の取組み</p>	<p>ア・自治会(生徒会)主体の学校行事の運営を教員がサポートし、生徒の自主性を育てる。昨年度、自治会執行部の新たな取組みが見られ、今年度はさらに進めたものにできるようにサポートしていく。 ・自治会執行部やクラスリーダーを育て、生徒の活躍の場を広げる。 ・体験講座や学校説明会等でのプレゼンテーションを生徒主体で行う。 ・体育祭や文化祭に近隣住民や、幼稚園・小学校の子供たちに参加してもらえるプログラムを考え、さらに交流の機会をつくる。</p> <p>イ・部活動の活性化を行い、部活リーダーを育成する。 ・部加入率を上げるために、入部紹介や体験入部期間を入学当初だけでなく定期的に設ける。その際、昼休みの校内放送を利用するなど自治会執行部と放送部が連携する。 ・学校HPや校内メディアを用いて、学校内外に部活動状況や成績など情報を発信し、また様々な機会を利用して生徒の作成した作品の展示会などの紹介を行う。 ・部活リーダー研修会を実施し、リーダーの育成とクラブ相互の連帯感を醸成する。 ・地元中学校と連携して合同練習会や試合等を企画し、部活における中学校との交流を活発に行う。</p> <p>ア・集団生活に必要なルールを教え、身だしなみや遅刻についての指導を全教員で継続して粘り強く行う。 ・生徒指導の統一性を図るために作成した「生徒指導の手引き」を運用し、年間懲戒者数の減少につなげる。 ・昨年度、遅刻の総数を10%減らすことができたが、その取組みをさらに継続する。</p> <p>イ・津波を想定した避難訓練を取り入れるなど、防災意識を高め、同時に命の大切さを学ぶ機会を増やす。年2回の避難訓練の実施と事前指導を丁寧に行う。</p>	<p>・各委員会を、月に1回、最低でも学期に2回実施する</p> <p>・部加入率を1年生で50%に上げる</p> <p>・学校HP、ムカガの活用</p> <p>・部活リーダー研修の実施</p> <p>・地元中学校との連携を増やす</p> <p>・年間の懲戒者数の半減をめざす ・遅刻総数を前年度比10%減じる</p>	<p>(1)ア・1月30日、球技大会を生徒主導で実施。FM大阪で生徒会長が学校の一言紹介を行った。学校説明会での司会と挨拶を生徒が行った。体育祭で保育園の園児との交流競技を行った。(○) イ・部活リーダー研修は実施できなかった。(△) ・男子バスケット部で中学校との交流練習を行なった。2月にはバレー部で、テニス部でも春休みに行う予定。(◎) ・年2回の部体験期間を設けたが、部加入率は昨年とほぼ同じ39%で、上昇しなかった。(△) ・校内メディアによる部活紹介更新は昨年より頻繁に行っている。(○) (2)ア・「生徒指導の手引」を作成・運用した結果、12月末現在の懲戒数は11件19人で昨年(22件23人)より減少した。(○) ・メロディーチャイムを導入し、2月末現在で昨年比14.2%減を達成。(◎) ・1学期に初めて津波避難を想定した避難訓練を実施した。(○)</p>
3 進路保障の取組み キャリア教育の指導計画の確立と	<p>(1) 「総合的な学習の時間」の有効な活用 ア 支援事業等の活用と人権教育等との連携 イ 情報把握と情報発信</p> <p>(2) きめの細かい進路指導 生徒一人ひとりの進路希望に対応した進路指導を行い、進路別講習と連動し、進路実績のアップをめざす。 ア 就職に関する指導 イ 進学に関する指導</p>	<p>ア・「総合的な学習の時間」とLHR等を活用して、志学とキャリア教育、人権教育を連動させた総合教育を行う。 ・「実践的キャリア教育・職業教育」支援事業の指定を受けて、専門コースの設置や授業評価アンケートなど今年度の取組みとのコラボレーションをはかりながら、目標の達成をめざして学校全体でキャリア教育に取り組む。</p> <p>イ・進路の手引きや進路ガイダンスを充実させ、「進路通信」を発行し、インターネットやメールを活用して情報提供を適切かつ迅速に行う。</p> <p>ア・個人進路指導カードを作成し、パート別指導を丁寧に行う。 ・就職主担・コーディネーターを中心に就職希望者に指導や支援を行い、就職内定率の向上をめざす。</p> <p>イ・難関といわれる大学にも最初からあきらめるのではなく、挑戦する意欲を育成する。 ・伝統校としての評価を取り戻すために進学実績を上げることを目標とする。 ・難関私立大学に合格する学力を育成する。</p>	<p>・就職内定率を前年度比10%向上する</p> <p>・関関同立や産近甲龍とよばれる大学への受験者を増やし合格する生徒を出す</p>	<p>(1)ア・3年間を見据えた総合的なキャリア教育の方向性をまとめた。来年度からの実施をめざす。 イ・3学年では成果が上がったが、1・2年からの進路実現への動機づけが課題である。(△) (2)ア・就職内定率は12月末時点で昨年度63%、今年度77%と向上した。(◎) イ・近畿大学、龍谷大学に一般推薦で合格者を出した。4年生大学のべ受験者・合格者はそれぞれ253,195と昨年(195,101)に比して受験者が増え、中でも中堅校以上は148、38と昨年(95,33)より大きく増えている。(◎)</p>
4 泉大津高校のビジョンの具体化	<p>(1) 泉大津高校の将来像の検討</p> <p>(2) 取組みの連動と校内組織の見直し</p> <p>(3) 学校力の向上</p>	<p>ア・将来構想ビジョン委員会で、3年間で育成する泉大津高校生のあるべき姿を検討し、泉大津高校のキャッチコピーの作成、3年間に行われる学校行事の見直しを行う。</p> <p>ア・学年や教科、分掌の取組みが有機的に連動しているかを総合的に判断する組織をつくり、校内組織の見直しも行う。</p> <p>ア・ミドルリーダーが中心になって、今後増えてくる経験が少ない教員への人材育成も組織的に行う。教育指導力のある教員を育成し、学校力を上げることを目的にする。首席がそのコーディネーターをする。</p>	<p>・泉大津のキャッチコピーを作成する</p>	<p>(1)ア・「夢、その扉を開くのは君だ!～元気な伝統校で」というキャッチコピーを作成し、今後のPR等を推進する。(○) (2)ア・報告の伝達経路などは、昨年より組織だったものに改善され、分掌等の連携が芽生えた。次年度は校内組織を見直す。(○) (3)ア・今年度は首席1名体制であったが、ミドルリーダーの中から首席や指導教諭の発掘推薦ができ、次年度さらなる学校力向上の下地ができた。(○)</p>